

II 環境教育のねらい

1 環境教育のねらい

「持続可能な社会づくりに貢献する人材の育成」
（「持続可能な開発のための教育」（E S D）の一部）

(1) 環境に対する豊かな感受性の育成

自分自身を取り巻く全ての環境に関する事物・現象に対して、興味・関心をもち、意欲的に関わり、環境に対する豊かな感受性をもつことができる。

(2) 環境に関する見方や考え方の育成

身近な環境や様々な自然，社会の事物・現象の中から自ら問題を見付けて解決していく問題解決の能力と，その過程を通して獲得することができる知識や技能を身に付けることによって，環境に関する見方や考え方を育むようにする。

(3) 環境に働き掛ける実践力の育成

持続可能な社会の構築に向けて，自ら責任ある行動を取り，協力して問題を解決していく実践力を培うようにする。

2 環境教育を通して身に付けさせたい能力や態度

環境教育では，環境に積極的に働き掛け，環境保全やよりよい環境の創造に主体的に関与できる能力の育成が図られなければならない。また，生活環境や地球環境を構成する一員として環境に対する人間の責任や役割を理解し，積極的に働き掛けをする態度を育成することが重要である。どの教科等でも基本的に育成しなければならない能力や態度のうち，環境教育を通して育成したい能力や態度として，例えば，次のようなものが考えられる。

【身に付けさせたい能力や態度（例）】

- ・ 環境を感受する能力
視覚や聴覚だけでなく触覚などの自らの諸感覚を活用して，環境を豊かに感受しようとする能力が必要となる。
- ・ 環境に興味・関心をもち，自ら関わろうとする態度
周囲の環境に興味・関心をもち，身体活動を伴った体験活動を通して環境に積極的に働き掛け，自ら関わろうとする態度を育成する必要がある。
- ・ 問題を捉え，その解決の構想を立てる能力
環境や環境問題に対して進んで働き掛け，自らの生活との関係の中で問題を捉える能力や問題を解決するための予想や仮説を立て，それに基づいて観察や実験，調査等の計画を立てる能力が必要となる。
- ・ データや事実，調査結果を整理し，解釈する能力
環境や環境問題は，時間的・空間的にスケールが大きく，また要素が複雑に絡み合っているものが多い。データや事実，調査結果を整理し，原因と結果との関係や部分と全体，事実と判断の関係などを吟味し，解釈を行う能力が必要となる。

- ・ 情報を活用する能力
環境に関して，自分に必要な情報を収集したり，相手の状況などを踏まえて発信したりする能力が必要となる。
- ・ 批判的に考え，改善する能力
環境に関する問題は，正解が一つということはない。そこで，自分の考えを証拠や理由に立脚しながら主張したり，他者の考えを認識し，多様な観点からその妥当性や信頼性を吟味したりすることなどにより，批判的に捉え，自分の考えを改善するといった批判的に思考する能力が必要となる。
- ・ 合意を形成しようとする態度
環境に関する問題は，不確定な要素を含み単純に答えられないようなものが多い。環境問題について自分の考えや意見をもってそれを表現するとともに，相手の立場や考えを理解し，社会的な合意を形成しようとする態度を育成する必要がある。
- ・ 公正に判断しようとする態度
環境に関する問題は，個々の問題が複雑に絡まり合った「環境問題群」というような形で認識されることが多い。そのような「環境問題群」は，多面的，総合的な観点から捉え，データや根拠に基づき実証的に考え，合理性や客観性を伴った公正な判断をしようとする態度を育成する必要がある。
- ・ 自ら進んで環境の保護・保全に寄与しようとする態度
環境に関する問題は，現在まさに起こっていることや近未来に起こることが予想されるものであり，我々がまさに直面しつつある問題である。議論や活動に主体的に参加し，自ら進んで環境の保全に向けた実践を行おうとする態度を育成する必要がある。

3 環境教育を捉える視点

持続可能な社会の構築を目指す環境教育を考えるためには，自然や生命，エネルギー，資源などの要素を個別に理解するのではなく，それらに関係付けて一つの環境を捉える視点として位置付けることが大切である。環境を捉える視点として，例えば，次のようなものが考えられる。

【環境を捉える視点（例）】

- ・ 資源の循環
我々が日常生活の中で使う資源は消費によって枯渇し，大量のごみとなって環境悪化の大きな原因となっている。廃棄物の削減，製品の再利用，更に資源の再生利用のための資源の循環の視点が大切である。
- ・ 自然や生命の尊重
地球上の生物は，数十億年に及ぶ進化の過程を経て多様な姿や生活様式を見せている。これらの生命の誕生，生物の成長の仕組みを知り，自他の生命を尊重し，自然への畏敬の念を育む視点が大切である。

- ・ 生態系の保全

植物や動物から微生物に至るまで、地球上の生物はそれらを取り巻く土壌、水、大気、太陽光などの非生物的環境との間の相互関係からなる自然の生態系を構築している。生態系は微妙なバランスの上に成り立っており、その保全に寄与することを通して、自然と調和して生きようとする視点が大切である。

- ・ 異文化の理解

地球上には、多様な文化や生活、価値観をもつ人々が存在している。これらの多様な文化や生活、価値観は長い歴史の中で形作られてきたものであり、それらを尊重し、平和で豊かな社会を構築しようとする視点が大切である。

- ・ 共生社会の実現

異文化理解や社会参画により、一人一人の個性が異なることを知るとともに、環境問題により多くの影響を及ぼすことがあることを理解し、共に生きようとする共生社会の実現を目指す視点が大切である。

- ・ 資源の有限性

資源は人間生活のために必要不可欠なものである。しかし、資源は基本的に有限であるため、大切に使うとともに環境負荷を減らし、循環型社会の構築を目指す視点が大切である。

- ・ エネルギーの利用

我々の生活は、石油などの化石燃料や太陽光、風力のような自然エネルギーなどの開発、利用によって成り立っている。しかし、人類によるこれらのエネルギーの使用は地球温暖化などの地球環境問題と密接に関係している。このことをよく理解し、エネルギーの適切な利用の仕方について考える視点が大切である。

- ・ 生活様式の見直し

エネルギーの利用に対応した形で、環境に配慮した生活様式を考えていく視点が大切である。環境の状態を調査・評価したり、管理したりすることによって、環境とバランスの取れた生活をする視点が大切である。

4 環境教育で重視する能力・態度、視点とESDとの関係性

ESDは、持続可能な未来や社会の構築のために行動できる人材の育成を目的としている。環境教育を発展させて、持続可能な社会の構築につなげていく場合には、ESDの視点に立った環境教育としていくことも考えられる。環境教育を通して身に付けさせたい能力や態度、環境を捉える視点を、ESDの視点（2012年 国立教育政策研究所「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」を参照）から捉えてみると、およそ次の表1、2のようになる。両者の関連性を各学校での取組のねらいと合わせて把握することで、持続可能な社会の構築を目指す環境教育の方向性が明確になると考えられる。

【表 1】身に付けさせたい能力や態度のつながり

身に付けさせたい能力や態度（例）	ESDの視点に立った 学習指導で重視する能力・態度（例）
・環境を感受する能力（感受）	つながりを尊重する態度
・問題を捉え、その解決の構想を立てる能力（構想）	未来像を予測して計画を立てる力
・データや事実、調査結果を整理し、解釈する能力（解釈）	多面的、総合的に考える力
・批判的に考え、改善する能力（批判）	批判的に考える力
・環境に興味・関心を持ち、自ら関わろうとする態度（関心）	つながりを尊重する態度
・公正に判断しようとする態度（公正）	多面的、総合的に考える力 批判的に考える力
・合意を形成しようとする態度（合意）	コミュニケーションを行う力 他者と協力する態度
・情報を発信しようとする態度（発信）	コミュニケーションを行う力
・自ら進んで環境の保護・保全に参画しようとする態度（参画）	進んで参加する態度

【表 2】対象を捉える視点のつながり

環境を捉える視点（例）	持続可能な社会づくりの構成概念（例） （持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだすための視点）
・資源の循環	II 相互性「物質やエネルギーの移動・循環」
・自然や生命の尊重	I 多様性「多種多様な生物や環境要因」、IV 公平性「生命の尊重」
・生態系の保全	II 相互性「生物と環境との相互関係」 VI 責任性「環境保全への寄与・役割」
・異文化の理解	I 多様性「多様な文化・生活、価値観」 IV 公平性「人権や文化の尊重」
・共生社会の実現	I 多様性「多様な個性」、V 連携性「共生社会の構築」
・資源の有限性	III 有限性「資源やエネルギーの有限性」 V 連携性、VI 責任性「循環型社会の構築」
・エネルギーの利用	I 多様性「資源やエネルギーの多様性」 II 相互性「エネルギーと環境問題との関係」 III 有限性「エネルギーの有限性」 VI 責任性「エネルギーの適切な利用」
・生活様式の見直し	VI 責任性「生活様式の変容」

参照：2012年 国立教育政策研究所『ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み』

http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_leaflet.pdf